

## 「即非京都」 榮榮&映里

「即非京都」は私たちが京都に着想を得て2015年から制作している写真シリーズです。固定的観念を破り写真表現の本質を見直すための試みとして、新しい視点や観点、世界認識の為の方法を探る行為も含め全体で非限定的な世界を表現する作品になっています。

2015年に京都に住み始めてから、私たちは京都の写真を撮ることに明け暮れ、日々写真を撮ることを繰り返していましたが、二人共が納得のいくような写真が撮れない状況が続いていました。「私たち」を主体とし、写真を通して見た京都は多様な現象にあふれていました。私たちは二人であらゆる手法や技法を用いて様々に撮り続けていたのですが、写真が美しく見えれば見えるほどそれは空虚になり、写っているものが確かであればあるほど表現とは遠く感じられ、次第に自分たちが何を求めて撮っているのかがわからなくなっていました。大量に写真を撮りながらも何も生まれえない苦悶な状況に陥りながら、それでも互いに「撮れない世界」や「必要ない写真」を撮り続けていたのです。しかしある日、京都盆地の地下に琵琶湖に匹敵する豊富な水量の水瓶、京都水盆があるという記事を見た時、急に何か天地が逆転するかのような意識の変換が起こりました。歴史、文化、風土が複合し重層的な景観を生み出してきた千年の都京都の文化的景観の根底で生命の循環を支えてきた地下水と水循環が深く影響していた。自然と人間の歴史、時空を超え生き続ける現象全てが有機的な全体性としての「京都」なのだと気づいたのです。その時「撮れない世界」や「必要ない写真」と思いこんでいた大量の世界の断片が一つの流れの中で突然調和性を持って立ち現れてきました。それは自分たちが作り上げたというよりは、すでに初めからそこにあったとでもいうべき自然さで存在していて、私たちは長い時間をかけてやっとここに帰って来たのだという思いに至りました。「京都」と「水」と「写真」の関係が自然と人間についての認識を深めるきっかけとなり、地球上の全ての生き物の生命活動を維持している水循環をあらためて認識する機会をもたらしてくれました。

石が導く深遠な時空に心をおき、目の前で交差し合う自然界の槁木に愛を再帰する。繰り返す日常と絶えずうつろう鴨川の流れに再生の喜びを知る。「即非京都」は「即非写真」であり、私達にとって過程であり必然的未来でもあるのです。

2021年8月9日、京都にて